





果シテ觀世音大菩薩、成利益此所  
 卷中、書ク如クテ、  
 如來有像、甚奇、  
 如來

今、カ、  
 今、カ、  
 今、カ、

北郵

寒燈夜話 小栗外傳 卷之四

東都 絳山歡醵陳人戲編

第七編

三傑山獵、  
 毒婦誑毀、  
 孝子と逐ふ

204

東

且泥其日、  
 小太郎一人の小賊を、  
 後者、  
 小太郎一人の大漢子、  
 大蛇の首、  
 小太郎も、  
 祀ふ



後者兄弟これ大木にて其勇力畧のほど大感賞し。さて云へり。はな  
我く兄弟呈下をえ失ひければ搜索すわらせんと山ほくりけを  
この岨道次をたれふ。頻ふ麻の啼声は。この何方なるや。四つと  
睦望ふ細谷川を隔ては對ひの岨に大木の松の梢に麻を居る  
る。怪しやと着着ればいと怖し蛇の麻を半吞して居る。西に  
蛇のあつちひると獵矢はひて蛇を射んとあつちひて蛇這方とんて  
忽ち麻を吐きて松の梢より頭さ下とさぬ眼の二つの鏡は雙々  
懸るるが如く。只の眞夜二ッ合したれが如し。巨口の中より火焰と  
えゆる舌大振動し。間近なまふ。兵助ひれりけは獵矢を  
ひきうと放ちけり。口の中に射ぬる。其射蛇を梢よりかんと落  
ぬれ。この志とあぬとあふ。さうなうて忽ち谷をさり。這程の岨に

近き草木れ上と走る音只疾風のよに兄弟これれを避んと大木の  
のや一本のふ走入る大蛇と兄弟をえ失ひ楠の梢よりえ下を起と  
大八郎より返りけり。二の矢を射ふ其矢唯中より。こふおのて大蛇  
弱り。と卒くも逐て。兵助大八郎の左右に散々射り。行はれ  
のこらして死より。今日獲物ありしを足して贖ひ。ゆりてははる葛  
をりて大蛇をくじ牽帰んとさうふ重れたと磐石のてくして牽  
る。能く其跡を斬て。こはて擲りてあはるふ。いそぐ勞われば  
此家ふ立寄休人と志つれくと蛇の首を小太郎はえさるふ。白うんと  
作り換へるはが如く頭をわが大木感。像て此山に大蛇住す。大  
まはれど。こへりといふ人。さうさう足下兄弟容易射をさるふ。こを  
勇し。これ後け山に蛇蝎の愁なるは。こを擲かへ。け其切を賞し



けり。さて斯くの如くは、いふに、後、さや家お還ると。三人各獲りの  
 持て行んと考られど、山路の案内も定ふ知らず、山賊の手下の  
 こゝにて、健守の如く、七八人を撰み、蛇の首と、筑間次郎と、大押  
 した。三人と七人の女子系、将て山と下り、れ、玉簾瀧の下、出で、小次郎  
 賊主、筑間次郎が首、大押、指ひ、し、城を、お對ひ、汝亦、今日より、この山お  
 居、え、う、い、若、此、命、と、用、と、我、再、び、山、塞、の、ひ、で、一、人、も、残、さ、ず、斬、殺、を  
 ぞ。今、此、地、より、山、塞、よ、還、り、我、云、は、く、と、汝、残、る、り、の、お、射、付、く、よ、と。  
 賊、亦、知、返、返、と、し、渾、畏、と、跪、ひ、て、い、く、ぞ、命、お、背、れ、や、と、人、の、通、れ  
 ぐ、と、く、山、塞、は、して、逃、ゆ、り、ぬ、ま、より、三、人、と、家、お、還、り、各、其、父、お、告、  
 ち、と、した。小四郎も、小女も、喜び、擒、ら、し、女子、亦、の、家、お、尋、り、て、居、り  
 ぬ、と、し、た。其、親、兄、身、の、死、び、の、死、せ、る、り、の、蘇、生、を、は、り、と、い、ひ、ぬ、り。

金銀布帛、とりて、謝、され、ども、小太郎、些、の、禮物、を受、と、悉、く、返、す、る、後、  
 くと、足、神、う、仏、う、と、さ、さ、と、喜、び、り、此、女子、の、うち、多、寺、の、郷、の、その、  
 の、い、く、小栗、助、重、も、この、や、汝、人、也、その、勇、畧、の、を、と、感、じ、彼、軍、の、  
 勇、名、武、が、家、の、忠、臣、なり、彼、家、一、回、と、亡、く、と、名、家、の、の、り、た、れ、後、  
 必、と、復、古、と、する、と、の、い、は、れ、た、お、彼、者、と、も、の、い、は、れ、た、お、其、家、う、か、り、と、今、初、て  
 居、る、が、身、の、生、業、お、は、し、は、く、何、方、お、仕、官、と、も、計、が、は、し、り、て、我、許、よ  
 養、ひ、置、各、武、が、家、名、復、古、の、耐、歸、系、と、と、俄、に、使、を、走、り、美、登、  
 小四郎、後、者、少、助、を、招、け、寄、り、お、母、お、貯、へ、つ、と、汝、は、又、た、れ、二、人、の、  
 助、重、が、遠、く、ゑ、の、を、感、佩、し、子、供、亦、を、助、重、の、臣、と、し、已、お、り、主、君、の、  
 行、跡、を、尋、ね、ん、と、是、より、美、登、四、郎、後、者、小、女、の、常、陸、國、と、ま、知、り、誰、知、ん  
 美、登、小、太郎、後、者、兵、助、後、者、大、八、郎、の、三、人、の、矢、口、津、よ、命、と、隨、せ、り、新、田、の



大蛇  
殺す

後藤  
兄弟  
山路



後

後藤大市

後藤兄弟

小栗卷之四

山ノ下



臣の再生ゆて是れ又前世の縁歟ひいて今君臣となり三世の契を果  
 り。嘗光過易く日月撥けり。小栗判官代助重を本國常陸の國  
 多氣城に居ること既七年に及びて於て善政日々に新なり。はると  
 民の風も善ゆつて移行ゆれば天も感して風雨十五の節を失ふ事  
 五穀よく熟し民の電も賑ひり。されば此村までも化國なる盜難の患  
 去るに民これが為苦しむる地方も安らじうと小栗判官色少道  
 路を落し給を拾ひて夜も戸をささげ枕を高くして太平を淫ひちり  
 助重民衆をえ斯て三年四年がうち飢餓賊難の愁ひあはじと  
 我回く君父小見春を且母没命多ひてより。ち支一回年お速  
 めねば君父も死なば母の墓も詰むと多氣の城へ池の庄平と  
 とら義登小太郎後友兄弟その外郎等教多残して城を守りせ。その

池の庄司風間兄弟加藤兄弟と宗徒の人とに数十人の下僕を  
 俱に應永北八年二月常陸を旅發鎌倉人こそ赴れられ高き旅路  
 めざされと助重素より遊観好され道ふまある地方もななく日あは  
 ちて鎌倉に到着けられ父と對面。本國の光景を物語り且八人  
 の良書を給りして父告げえ池庄司加藤風間の兄弟を父の兄弟  
 む入にぬれぬ満重もよれ郎等を給りて喜びね叔その夜日所を赤  
 持氏の元へ入りに君も喜び多し手物賜ひちり助重  
 熟く持氏の光景を頼み七年がやを待ねるうち昔より異はして  
 萬風流は瀟湘のさへくさせまひはね公の行跡く秘ひ跡も  
 と幾回く多しとれと誓附は側もはなれ外松のやうめておくれ  
 好られ且と年経の身とりて賢者なるも畏られぬと念する



而也。かして空しく。前をばうて。尚心慍。父満重。私語をば。某  
 今日。所ふ。余の。君の。先景を。ころす。昔。あ。似。げ。や。よ。は。る。驕。び。し。や。あ  
 中。あ。ち。の。斯。て。さ。ま。ら。い。さ。る。不。思。議。の。事。も。ん。も。新。く。う。ら。某。一。言。の。殊  
 を。し。げ。う。と。ひ。げ。れ。と。申。く。ら。ち。後。で。避。近。を。あ。入。ら。ず。君。の。怒。を。侵  
 せ。ん。と。の。畏。る。ま。い。ら。で。止。ま。ら。り。父。上。の。怒。ひ。と。ら。り。職。柄。の  
 お。次。げ。の。折。を。り。て。海。の。り。再。ら。ざ。れ。後。暗。を。嘘。の。怒。ひ。わ。ん。と。ま。り  
 ち。ね。の。満。重。を。ち。笑。ひ。我。の。心。を。め。ぶ。既。母。家。校。と。議。し。も。あ。る。と  
 と。語。り。助。重。を。び。さ。ら。さ。ら。さ。ら。有。つ。る。や。某。鈍。く。父。上。の。怒  
 慮。を。知。ら。ず。と。う。言。し。は。る。こ。の。愚。か。ら。と。喜。ひ。ち。り。こ。の。満。重。が  
 妾。後。浪。の。豫。て。助。重。を。悪。し。う。あ。せ。て。逃。失。し。我。子。万。千。代。母。家。校  
 嗣。さ。と。く。と。ひ。時。へ。は。る。こ。と。え。故。母。前。年。助。重。を。常。陸。よ。下。せ。し。も

後浪。う。と。と。え。お。よ。り。て。なり。その。う。ち。あ。れ。助。重。年。少。な。れ。盗。賊。を  
 退。治。さ。れ。て。終。つ。ま。し。その。時。を。不。肖。の。子。なり。と。尚。疎。を。か。ま。り  
 家。を。逐。ち。き。ん。謀。なり。し。助。重。常。陸。を。り。と。幾。程。な。く。賊。を。平。け。廻。り  
 治。り。ぬ。と。案。も。相。違。し。け。り。今。春。判。官。代。助。重。母。の。十三。回。忌。を。吊。り。ん  
 こと。鎌。倉。小。上。り。た。れ。此。時。を。失。う。と。判。官。代。行。状。を。窺。居。る。に  
 今日。父。と。私。語。を。何。ゆ。か。ら。ん。と。紙。門。を。隔。く。ま。り。れ。目。今。助。重。父。が。あ。と  
 去。る。を。行。兼。後。浪。を。ち。ね。さ。ら。ぬ。さ。ら。ぬ。満。重。が。前。は。お。い。と。愁。ひ。し。う。と。い。て  
 言。結。を。も。云。つ。と。た。嘆。息。し。て。居。る。満。重。不。審。その。故。を。問。へ。と。後。浪  
 う。ら。み。し。眼。を。お。ね。ぐ。し。て。ま。り。た。れ。安。事。や。ら。ん。若。後。常。陸。よ。お。い  
 る。うち。無。頼。の。們。を。多。く。召。抱。へ。ら。れ。平。生。の。側。に。置。籠。愛。し。ま。い。し。彼  
 們。素。強。盗。野。人。な。れ。ば。ま。く。不。良。子。を。切。ち。ぬ。し。し。る。行。ふ。い。つ。も。驕。奢。の



出まひ早く家を知らしめしむのまうと行ひまうんとおやたせしまうんが  
 母上の山手亭と披露のり。今回鎌倉よりあつたひ鎌倉を運ばし殿を  
 後傾の山前悪うるまうしおして山隠居せしめんと志まうはしり者  
 のふ足んたうと後者ゆりて斯く船をゆりてあつたひ此より船へ  
 入へはあつたひのありては親子の山回と接しての方入此こはへま  
 らしむこれとまうまひはあつたひは若殿のいことまうとまうとまうと  
 満重様と波浪が後まより助をを疎んどうも今又波浪が所々ま  
 判官代助まが鎌倉と練よと云ことまうとまうとまうとまうとまうと  
 疑ひのむしどやと女子の純を浅なりかなれば云知れ用ひが悪うるん  
 と色なつてまうのつはらうで我子助をまあつてさる心めん相うるん  
 まうのこ云もまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうと

よの后何となく父子の間疎くなる。終小判信代助重を別荘に接し居る  
 中うになりまうの助重を父の命うたへまうとまうとまうとまうとまうと  
 と愛が父の失ひはるやと安れまうなりけり。日月閑守なく。時既ま  
 三春天ふなりまうの。此月母初瀬の祥月なれば墓に詣佛お供養に  
 布絶して懇お冥福と祈たれ。さて其祭まあつたひ。餅菓守りれ物と父の  
 りとあつたひの母の記はあつたひのなればまうとまうとまうとまうと  
 満重の御所まあつたひを跋お居る波浪祀の供物とまうとまうとまうと  
 此所こまうのまひを遂ねと贈りしは餅のらちへ蜜うか沈毒入る  
 そ妙なまあつたひ居るりけれ満重を妙ともあつたひ御所をまうの  
 還らふ波浪の迎られてまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうと  
 其祀は供へしめとて此まうとまうとまうとまうとまうとまうとまうと



前ふさー 變り。満重はびびり。子判官代が孝する。今おとあぬこと  
 かうから。よくも母が菩提の為として。多く冥福を営ごと。辨後かん。こ  
 其志まの。何物なれ。我も食ひく。孝子の志まを受んと。既食ひぬ  
 ろうと。それを。波浪慌忙く。止むて。中。は。親子の。間。は。疑  
 疑ん再のれ。毒昨夜の。友え。よく。且。の。使。を。近。に。抱。ら。し。村  
 糸の者う。持。身。は。れ。ば。よく。ま。試。を。食。多。人。と。強。よ。と。先。多。と。ゆ。糸  
 さる。この。お。え。れ。と。餅。を。手。お。う。けて。食。ん。と。さ。る。ふ。何。と。や。人。悪。き。臭  
 の。あ。れ。が。こ。い。つ。め。と。う。ち。か。く。は。る。え。角。え。る。と。さ。ら。か。よ。畜。の  
 佛林狗の。めり。な。れ。が。主の。餅。を。手。お。持。て。角。を。を。已。ま。よ。あ。る  
 と。や。お。り。ひ。え。花。か。ん。て。其。餅。を。棄。し。食。ひ。ぬ。満。重。と。狗。の。に。さ。る。え  
 ろ。も。し。を。怒。り。は。よく。吃。正。じ。や。と。佛。林。狗。の。畏。み。を。れ。も。り。と。ら。せ。て。

極の端由。遊土踏居。り。怪し。ひ。う。船。を。る。が。う。ち。俄。か。一。声。を。う。叫。び  
 躍り。わ。や。と。こ。ん。へ。鮮。血。濺。くと。吐。き。四。足。を。空。ま。ぬ。は。て。死。る。満。重  
 この。光。景。を。こ。え。さ。て。此。餅。毒。めり。な。れ。が。いと。危。し。且。は。怒。り。且。は。怒。り  
 我子助重。い。う。ら。れ。ば。毒。めり。の。を。り。て。我。子。送。ら。る。是。必。ぞ。これ。が。害  
 さん。為。ら。る。う。今日。す。で。も。彼。の。孝。子。と。思。ひ。ん。が。大。逆。の。企。と。う。ら。る。  
 こ。そ。不。敵。な。れ。い。で。其。後。な。う。速。に。彼。を。殺。し。不。孝。の。罰。を。知。せ。んと。  
 し。ま。す。死。め。ら。く。罵。り。は。け。り。人。数。を。集。ひ。我。子。討。んと。い。め。ら。り。ら。ま。  
 田鍋平太。と。い。ふ。体。者。儻。めり。けり。是。れ。その。公。を。入。直。なり。し。や。と。満。重  
 万。子。代。の。傳。臣。と。な。り。け。る。が。平。太。平。生。の。友。浪。が。行。状。の。不。良。を。公。ら。き  
 こ。お。ひ。折。ら。風。流。に。な。れ。が。今日。の。奉。も。藤。浪。が。做。ら。し。め。ら。れ。せ。し  
 か。と。明。白。な。体。籠。ら。る。は。流。れ。も。せ。り。し。満。重。怒。り。乗。り。助。重。が



失ふんとのうふ結るに違を以てしつゝ怒りさるることなきがらふや殿  
 助を君の行跡へ人も知りては孝子ゆゑとて大逆の企及なし  
 めふべしこれ女子細こそらあ一旦の怒りも卒忽の事あるら  
 後必ぞ悔ふふこと信らん恐るるがごとく慮り多くと判官代が平生の  
 美を奉て練を体ゆも満重も此練をゆき少く怒りゆりされど  
 尚疑ひ暗さやめりせん平太小對ひ譬害心かたゆもせよ毒ある物  
 を試みて父がりとく嫁る條子するりの做るまじこと君父疾める  
 とらぬ臣子するりのまづ其服毒を嘗としらざる助重も知りつゝあ  
 汝目今判官代がりとく往と其子細を乳とぐとめりつれも平太の  
 主の怒の少く解く体を喜び畏りて往は別荘に赴け判官代助重  
 小對面して今日の光景を詳し述べ主の命を傳へられ判官代大まふ  
 驚死天小嘆死地は泣しと初見の母おはすじこととめて泣きしこそ  
 哀しみたり平太も俱ふ泣くやあつてりける君の孝あるをばよく  
 知りぬがしとめいと畏るしと我養君万代君れ母上波浪どの心  
 こそ疑りしゆの多う此人の毒手か命をおとらぬんこと何の  
 詮らゆらんをゆくは身を退け時を待たふこそ賢まきゆふそふなる  
 危あも角もも君恙なくもさるる孝の道もたらずはよ凍お  
 ずしゆ人ととむらふ助重これを父斯て我死をりて罪なれこと  
 述るとも波浪ゆんかまりへ父の奴に解がじとさるる平太は對ひ汝  
 忠なれ志意謝とるふ処は我一京の害心はとくと波浪嚴謀  
 後とかや父を怒り我を申生の冤罪を稟じたりされば死をりて  
 父の心が易くはたぬれと汝が諫道理ゆれば誓耐死を止りて時の



毒婦の計  
父の  
同  
隔



新古今和歌集

東浦屋

海

東浦屋



変を窺ふ。汝忠義を勵し、身万千代を賢者とす。小栗の家を嗣  
 とすべし。これ頼と笑へる。平太涙をもちひ小臣が涙を聴めし。あて  
 感佩中のよ処みしが。うへ我不肖なりと。と力成せし。万千代君を  
 保育せし。目出度。此對面なは。しや。入其の。深く。煩ひ。あり。な。尚  
 それ。よ。も。若殿の。此地を。去。退。め。あ。も。必。さ。ま。ま。去。り。多。ひ。そ。何。方  
 あ。も。の。れ。便。の。宜。い。處。お。在。せ。さ。の。ひ。う。ら。ん。小。臣。の。二。人。の。男。兒。の。ゆ。故  
 の。て。家。お。居。し。め。ど。今。へ。下。総。は。居。る。は。し。し。れ。彼。國。か。こ。こ。せ  
 多。ひ。二。人。を。出。守。の。て。今。回。の。ゆ。を。命。せ。し。ま。り。よ。く。仕。へ。ま。ぬ。と。入。し。  
 さ。の。れ。彼。亦。を。君。ひ。さ。しく。こ。ん。多。の。ま。れ。い。え。忘。れ。ず。ぬ。し。ら。も。討。懸。  
 これ。成。り。て。男。兒。亦。よ。多。多。と。一封。の。書。を。写。り。て。與。へ。ま。し。し。の。助。手。の  
 平。太。が。忠。と。ら。は。好。意。を。去。け。其。絲。ふ。ま。り。し。さ。ら。は。と。と。常。陸。より

陪従す。りし。の。暇。を。と。り。僅。池。庄。司。風。間。兄。弟。加。友。兄。弟。五。人。の。者。を  
 召。傳。し。鎌。倉。を。ら。ち。ま。て。平。太。を。教。は。り。し。下。総。國。へ。と。赴。け。ぬ。小。栗。主。従。の  
 心。裡。い。う。ま。の。と。推。め。あ。ら。れ。て。憐。れ。り。且。説。又。田。鑑。平。太。が。見。ど。も。と。ら。ん。  
 兄。が。平。六。前。長。秀。と。云。身。を。平。六。前。長。為。と。し。り。ま。り。二。人。と。も。武。義。を。去。達。し。  
 大。力。量。の。り。の。わ。る。う。親。は。仕。へ。て。考。へ。り。け。て。然。る。去。年。の。三。春。の。上。旬。こ  
 由。比。が。濱。の。潮。落。お。行。く。と。兄。弟。ら。ち。連。が。ら。て。鶴。が。岡。の。一。枝。準。表。の。邊。より。  
 七。里。の。濱。を。其。よ。此。所。よ。と。徘徊。し。終。日。貝。を。拾。ひ。魚。を。漁。り。射。撃。を。す。る。は。  
 日。既。ふ。西。に。斜。な。る。と。と。は。あ。も。と。し。や。家。話。ゆ。り。と。綱。を。擔。ひ。平。太。が。勢。  
 て。雀。の。園。の。社。の。側。ま。で。還。り。ま。り。此。地。お。兄。弟。が。家。お。平。生。親。し。く。出。入。し。る。  
 酒。肆。の。り。主。を。三。輪。七。と。し。り。兄。弟。の。門。迎。を。過。り。着。て。これ。を。喝。け。け。緒。  
 入。れ。酒。肴。を。出。し。食。意。せ。い。兄。弟。が。び。主。と。こ。人。錢。杯。を。傾。け。十。分。と。酔。る。



折らば俄に門辺一掃に罵り叫ぶ声とれは三人の怒り何れもさうも  
 るふ一人は天狗五郎といひて一色詮秀が下僕なり一人は小断此天狗  
 五郎といひて元来を頼の悪漢めて力量敏捷の達人なり平生高より  
 下きも花びらて自在なれば天狗と異名せり一色此りの愛をこれごと  
 大さうさびのりなり。さう主の權威と己が力とを負み日く市街  
 歩く悪口をれを傲ま酒肆お入る飽ちて飲ども一回もその價を償ひ  
 事し其價を需体とれ器皿を投破店をうち毀暴悪擅ふさ  
 と一色の威を恐れこれをせむるの三輪七が家おも折くまて酒肉  
 を食へと後一錢を償ひては今日もまた飽ちて飲食して去ん  
 とと志すは小断の近日くおまをるりのなれば天狗のこをちる酒肉  
 の價を需るは物欺多るなりおれ我と知るや家と天狗と  
 ののろろを近日のち天より令限の雨とある人其財酒肆を償つと  
 云はるま退へとされ小断の嘲弄せしはを懐り前後のことと願を  
 しきやれて罵りたるおれ漫言りて我を欺く天より宝瓶一  
 まらうて汝がよあるを付ん酒の價の明日と云うを既に今吞ふあは  
 や今日銭さう衣服めても脱て去とありはあそ天狗大に怒りこれ  
 此年頃都鄙を横行して多く酒肆をるりて酒を吞ると一回も衣服  
 を解く酒の價を償ひては汝我衣被やく脱てて去るのやと  
 欺け小断はち怒り我より汝が衣服を脱ててと追て近き  
 天狗拳を極うらめ小断の眉をちり打つるけりて  
 た手うんれおちち地は倒れ鼻口より鮮血流れ出て苦い吐き  
 三輪七これを着て慌忙く天狗を叩きつけてけり此小断近日抱へ



下を着知るに無礼の言を申して怒らせしめぬ。狂ていほし多と淫あれば天狗の尚威猛なるが云はく。後の懲りぬと知りしに我の恥辱をよきし。後の懲りぬと知りしに我の恥辱をよきし。後の懲りぬと知りしに我の恥辱をよきし。

打擲して三編七の大力を投入られ此も働くと社をどく。声を揚し泣叫ぶ田端兄弟これを着て天狗が暴悪なる。まじ五六間投退三編七を助け起せ。天狗大ま怒り起せ。擲して平六郎を斬てかけられ。酒籠をとめて投付。天狗が頭をぶらぶら。

飛をさへんと聞ゆる所を平八郎の勢ひ。鳴と叫び倒し。

栗巻

けり。南村権威ある一色詮秀の下僕なれ。我人殺の罪に逃れ。常言。三十六計走るを。これより直に某が生園下総の結城へ。兄弟の罪は伏して死ん。兄の罪は伏して死ん。兄の罪は伏して死ん。

追人のからん。夜行を止す。下り。結城に至り。著ね三輪七。告身の上。音耗を窺。



夢とまごころが此國すてゝ索ち移る。三人心を易かり。田鍋足す。奴の  
りしく此地方に居るよしを告知をせ。さて生産のこゝに織るる。三輪七  
少くは賤めれば足を本物とし。仕執り酒肆を出し。三人を合し。生業  
お台やうざりし。三人の口は糊とる。易く。あつて。此地は忍び居る。

第八編

西雄を市小得て因縁全一  
一老城一死一々奸邪濫作

柳此結城といふ地方に結油を織をりて子生の生産とをわが諸國より  
商人とて仕奉ひ其織所の緒を買い旅客の絶間なく。土地自くら  
富饒して青樓酒肆軒を並べ。その繁栄をとく。京滯会ふ。及  
けり一掃めれば一失あり。と勘却舎とる地なれば其民自ら橋俠客多く  
鬪争日く海して民の煩多う。され然る。三輪七く。酒肆と。及

北都

下谷画 御徳町武下

北都



